本土防衛従軍記

高見沢　昇
野方六丁目

私が本土防衛要員として、北支派遣軍から内地の東部軍に転属を命ぜられたのは、終戦の年の四月二九日である。

当時米軍は沖縄に上陸しており、中国から朝鮮を経由して博多上陸までの道中は、陸、海、空とも米軍の銃爆撃にさらされ危険であった。

夜行列車で博多から東京に向かったが、列車の窓は固く閉され、熱海に着くまで開かれなかった。熱海駅で買った駅弁は、飯の代わりに豆粕が入っていた。東京に近づくにつれ、横浜あたりから戦災の跡がなまなましく、北支で想像していた以上であった。

東部軍司令部に出頭し、水戸の連隊の通信中隊付を命ぜられたが、六月に入り、新設の独立混成旅団通信隊長として、茨城県鹿島海岸の防衛を担当することになった。私の任務は旅団司令部と、傘下の各大隊本部との通信線の確保である。

ところが、旅団長からは、「必要な通信器材は貴官の責任に於て調達せよ。必要な資金は十分に出す」と言われた。

旅団通信隊は二二〇名の編成で、兵は現役であるが、下士官は召集の年配者ばかりである。出身地は関東一円の郷土部隊であったので、京浜地区にコネのある下士官を派遣して、無線機および電話機と回線材料を買い集めることが出来た。

七月に入り、それまで起居していた学校の体操場から、海岸の民家に分宿することとなった。部隊本部の宿舎前に衛兵所を設けたが、歩哨に渡す小銃がない。止むなく竹槍を持たせたところ、村民から「いくら強い兵隊さんでも、鉄砲がなければ、戦争は出来なかんべえ」と言われた。

小銃ばかりか、腰にさげる帯剣も剣身だけで鞘が支給されない。止むを得ず、竹製の鞘を大工の経験がある兵を動員して作らせ、剣身を収めることができた。

次に旅団命令で、各自が海岸の砂地に艦砲射撃と空襲を防ぐ「タコツボ」を掘ることとなった。しかし、穴堀り道具の円匙（スコップ）が支給されない。止むなく、「家にスコップのあるものは、外泊を許可するから持参せよ」と言ったところ、全員

が家に帰って持参して来た。なかには、近所から寸借したのもあった由である。

このように、人は令状一枚で招集することができても、武器も資材もないままの本土防衛で、米軍が上陸開始したら、水際で全員玉砕覚悟の毎日であった。

準備不十分のまま終戦を迎え、万死に一生を得て、その年十月復員し郷里松本市に還ることができた。

「武士(もののふ)の　いくさ敗れて還るとき
　ひかり　変らぬ　利根の月かな」

これは、復員の日の夜、利根川の渡船の上で、月を見て詠じた自作の歌である。